

史伝に見られる森鷗外の歴史観

古賀 勝次郎

(一)

森鷗外は、『伊沢蘭軒』その二十の中で以下のように言っている。「わたくしが渋江抽斎のために長文を書いたのを見て、無用の人を伝したと云ひ、これを老人が骨董を掘り出すに比した学者」があつた、と。この「学者」が若き日の和辻哲郎であつたことは今ではよく知られている。和辻は、大正五年、『新小説』七月号に、「文化と文化史と歴史小説」という文章を寄せ、『渋江抽斎』を取り挙げ、次のように書いている。「私は部分的にしか読まなかつた『渋江抽斎』をここで批判しようとは思はない。にもかかはらず私は先生の態度に対する失望をいはないではゐられない気持ちがある。……しかもあの頭のよさと確乎しつかりした物の掴み方とは、ともすれば小さいく、だらない物の興味に支配されるのではなからうか。……私は『渋江

抽斎』にあれだけの力を注いだ先生の意を解し兼ねる。私の憶測し得る唯一の理由は、『掘り出し物の興味』である。しかし埋没されてゐたといふことは、好奇心をそそりしめても、その物の本来の価値を高めはしない。その物の価値は『掘り出された』ことと独立して判定せられねばならない。……例へば中央アジアで発掘された仏像は珍奇な発掘品である故に価値があるのではなく、ある時代の文化を象徴する少数の遺物である故に芸術的価値以外に更に尊さを加へるのである。抽斎の伝記にはそれがない。彼の個人としての偉大さも文化の象徴としての意義も、先生のあれだけの労作に価するとは思へない。」^①上に若き和辻哲郎という言い方をしたが、しかし、和辻のこのような考えは、晩年まで変ることにはなかつた。和辻が残した膨大な文化史的・思想史的研究は殆どすべてこのような考え方に基づいて書かれている。

一体、森鷗外と和辻哲郎の考えのどこに違いがあるのだろうか。鷗外は、上の引用文に続けて以下のように言う。(和辻のような) 学者は、「蘭軒伝を見ても、只山陽茶山の側面観をのみ其中に求むるであらう。わたくしは敢て成心としてそれを斥ける。わたくしの目中的抽斎や其師蘭軒は、必ずしも山陽茶山の下には居らぬのである」。^②これに対して和辻はどうであつたであらうか。「文化と文化史と歴史小説」を書いて、三十数年して刊行した大著『日本倫理思想史』の頼山陽の章のはじめのところで、和辻は次のように言っている。「われわれの前の世代の人々は……漢文や漢詩の内容に着目する前に、その表現の形式からして異様に強い魅力を感じたやうである。……さういふ感じ方の記念碑的な作品としては、森鷗外の『伊沢蘭軒』『洪江抽斎』などをあげることができるであらう。これらの学者はちやうどここに取り扱つてゐる時代の優れた考証学者であつて、純粹に学問的な業績といふ上では、(藤田) 東湖や山陽よりももつと重んずべきであらうが、しかしこの時代の動揺してゐる思潮に働きかけるといふことをした人たちではない。鷗外はこれら学者及びそれと交友関係のあつた菅茶山、狩谷棧斎、頼春水、頼山陽その他多くの学者を捕へ、その日常生活と、それを表現してゐる詩作とに、異常な関心を示してゐる。……頼山陽は、鷗外が同情をもつて描いてゐるじみな考証学者の群れとは、類型を異にする学者である。しかし漢詩漢文に強い魅力を感じるといふ気分がなかに生きている、さういふ気分が仕事をしたといふ点では、同一であるといはなくてはならない。」

最早や、鷗外と和辻の違いは明らかであらう。それは、漢文漢詩を味読できる世代とできない世代という、単なる世代の違いだけではない。和辻が文化や歴史を理解する上で重視しているのは、「ある時代の文化を象徴する」ものであり、「時代の動揺してゐる思潮に働きかけるといふことをした」、「じみ」でない人たちである。恐らくさういう理由で、頼山陽も、『日本倫理思想史』において、重要な日本の倫理思想家の一人として選ばれたのであらう。これに対して鷗外が、少なくとも史伝で重視したのは、時代の文化を象徴するような人でなく、時代思潮に働きかけたような人でなく、至つて「じみな」人たちであつた。鷗外三大史伝の主人公である洪江抽斎、伊沢蘭軒、北條霞亭などは、まさしくさういった人たちだったのである。しかし上に、少なくとも史伝ではと断つていたように、鷗外も、明治末頃までは、和辻が重視したような——特に西洋の人たちから多くを学んでいたし、しかも、とりわけ若い頃は、自らさういふ人たちのように振舞つていたのである。医学は姑く措くとして、鷗外が評論や文学などの領域で、ハルトマンやゲーテ、ニーチェやイブセンなどを紹介したり論じたりして、果敢に啓蒙活動を行つたことは、何よりもそのことを雄弁に物語っている。しかしさうした時代の鷗外も、他の啓蒙家たちとは、些か違つていた。

『北條霞亭』のその一、つまり冒頭のところで鷗外は以下のように言っている。「霞亭は学成りて未だ仕へざる三十二歳の時、弟碧山一人を挈して嵯峨に棲み、其状隱逸伝中の人に似てゐた。わたくしは嘗て少うしくて大学を出た比、此の如き夢の胸裡に往來したこ

とがある。しかしわたくしは其事の理想として懐くべくして、行実に現すべからざるを謂つて、これを致す道を講ずるに及ばずして罷んだ。」もし、鷗外が江戸時代に生を享け生きていけたのであれば、恐らく霞亭と同一ような道を辿ることもできただろう。しかしそれは不可能なことであつた。日本の近代化を推進することが、知的エリートとしての鷗外に課せられた逃れることのできない責務だつたからである。そして鷗外はその責務をよく果たした。だが、鷗外の活動は、他の知的エリートとは異つていた。明治初期の若き知的エリートたちの多くは、それまでの東洋・日本の文化や歴史を棄てあるいは軽視して、西洋近代文明を導入しようとしていた。鷗外がこうした人々と選を殊にしていたことは言うまでもない。鷗外は、東洋・日本の文化・歴史を余りにも深く身に付け、尊重していたからである。しかし、鷗外の東洋・日本の文化・歴史に対する尊重は、時代を象徴し、時代を動かした偉人たち、その事跡や思想に止まつてはなくて、「日常生活」の中に深く浸み込んで生きている東洋・日本の文化・歴史にも及んでいたのである。そうした、日常生活の中に生きている文化や歴史を支え守っているのは、じみだが堅実な人たちであつた。『カズイスチカ』の中に、次のような文章がある。「熊沢蕃山の書いたものを読んできると、志を得て天下国家を事とするのも道を行ふのであるが、平生顔を洗つたり髪を梳つたりするのも道を行ふのであるといふ意味のことが書いてあつた。花房はそれを見て、父の平生を考へて見ると、自分が遠い向うに或物を望んで、目前の事を好い加減に済ませて行くのに反して、

父は詰まらない日常の事にも全幅の精神を傾注してゐるといふことに気が附いた。宿場の医者たるに安んじてゐる父の resignation の態度が、有道者の面目に近いといふことが、臆気ながら見えて来た。そして其時から遽かに父を尊敬する念を生じた。」この文章の中の「詰まらない日常の事」という言葉に注意すべきであろう。それはまた、「あの頭のよさと確乎した物の掴み方とは、ともすれば小さいくだらない物の興味に支配されるのではなからうか」、と和辻が鷗外の『洪江抽斎』に対していつた言葉と対比されてよい。

勿論、洪江抽斎も、伊沢蘭軒や北條霞亭も、学者である。しかし「考証学者」である。考証学は至つて「じみな」学問である。一語の解釈に、多くの時日を費すのは、あるいは「小さいくだらない」ことかもしれないが、考証学者はそれに「全幅の精神を傾注」する。そして鷗外はそうした考証学者を高く評価するのである。いや、考証学者たちの日常生活をも、重要大切なものとして尊重する。だからこそ、鷗外は史伝を書いたのである。和辻は、『洪江抽斎』について、抽斎の「個人としての偉大さも文化の象徴としての意義も、先生のあれだけの労作に価するとは思へない」というが、鷗外は、抽斎などの学問、そして彼らの日常生活は、全力を傾注するに価するものと考えたのである。

(二)

上述したように、鷗外は決して和辻のような考えを批判・否定し

ているのではない。それどころか、若い頃の鷗外は、和辻のような考えを、自ら行動に移していたのである。『あそび』の中にも、「実は木村も前半生では盛んに戦った」、とある。木村が鷗外の分身であることは言うまでもない。では鷗外と和辻の違いは奈辺にあるのだろうか。和辻が重視したのは、時代を象徴するもの、時代を動かすものであった。これに対して、鷗外が重視したのはそれだけではなく、より深いところのもの、より基礎にあるものを重視した、いや、前者よりも後者の方をより重視した、といつてよからう。大正時代に入って書かれるようになる歴史小説でもそれは多少見られるが、史伝に至って顕著になったのである。

鷗外は、文化や歴史を、表層の文化・歴史と深層の文化・歴史とを分けて考えていたといつてよからう。時代を象徴するもの、時代を動かすものが文化・歴史の表層である。その表層の世界を扱ったものを歴史小説の中に求めるならば、『大塩平八郎』や『津下四郎左衛門』などであろう。しかし、横井小楠は津下四郎左衛門の敵相手として、間接的にしか描かれていない。とすると、文化・歴史の表層を扱ったものとして特に注目されるべきものは、『大塩平八郎』ということになるだろうか。そして結論的に言えば、鷗外は大塩平八郎を必ずしも評価してはいない、寧ろ、消極的、批判的に扱っているといつてよからう。それは、『附録』に出ている以下のような文章からも明らかであろう。「平八郎は換言すれば米屋こはしの雄である。天明に於いても、天保に於いても、米屋こはしは大阪から始まった。……平八郎は哲学者である。併しその良知の哲学からは、頼

もしい社会政策も生れず、恐ろしい社会主義も出なかつたのである。」

ところでここで問題にしたいのは、大塩平八郎と頼山陽との関係である。鷗外が、『伊沢蘭軒』、『北條霞亭』において、描き出したかった構図の一つに、山陽と蘭軒、霞亭との対比——これこそ、文化・歴史の表層の世界と深層の世界の対比といつてよいもの——があったといえるが、その山陽は、大塩平八郎と親密な関係を持っていたのである。そのことは、『大塩平八郎』の年譜の中にも見えている。天保元年庚寅のところに、「九日平八郎名古屋の宗家を訪ひ、展墓す。頼襄序を作りて送る」、とある。また、天保三年壬辰のところに、「平八郎四十歳。四月頼襄京都より至り、古本大学刮目に序せんことを約す。……秋頼襄京都に病む。平八郎往いて訪へば既に亡し」、とあり、翌四年には、「四月洗心洞割記に自序し、これを刻す。頼余一に貽る」、とある。頼余一は山陽の長子聿庵である。『大塩平八郎』では、鷗外はこれ以上、平八郎と山陽の関係を示す事跡を記していないので、いま少しく両者の関係を見ておこう。平八郎は陽明学者として夙に知られていたが、実際に会って、王陽明を尊敬する念のはなはだ大きいのに改めて感じたのであろう。山陽は平八郎のことを「小陽明」と呼ぶべきだとしている。即ち、「知る君が学は王文成を推すを、方寸の良知自ら昭霊、八面鼓に応じて余勇あり、君を号して当に小陽明と呼ぶべし」(『訪大塩君。謝客而上衛。作此贈之』)、と。また、『大塩平八郎』の「附録」にも記されていたが、天保元年、平八郎が職を辞し、先祖の墓参りのた

め尾張へ旅立った時、「奉送大塩君子起適尾張序」を草したが、その冒頭のところで、山陽は次のように言っている。「方今海内の勢三都に偏す、三都の市皆尹あり、而て大阪最も劇にして且つ治め難しと称す、蓋地大府に潤絶し、而て商賈の窟する所と為り、富豪廢居し、王侯其の鼻息を仰いで以て憂喜を為す……吏に良ありと雖も、衆豪敵せず、浮沈容を取るのみ、近時に至るに及んで、乃ち吾が大塩子起あり、吏の郡に奮ひ、独立撓まず、克く其の姦を治め、国家の為に二百余年の弊事を祛く……」⁽⁴⁾。この送序は、全体が平八郎の志と行績を讃えるものとなっている。そして平八郎もそれに応えて、山陽死後に刊行した『洗心洞箭記』の附録に、「入刻亡友頼山陽之序與語於箭記附録自記」を付した。⁽⁵⁾ その自記の中で平八郎は、自分は吏でしかも王陽明を崇敬しているの、一般的には山陽と相い容れないように思われるかもしれない、「然れども往来絶えず、送迎絶えざるは何ぞや、余の山陽を善みするものは其の学にあらずして而て竊に其の胆にして識あるを取る」、と言っている。天保三年四月に、大阪にやってきた山陽は酒席で、確かに、「兄の学問は心を洗うて以て内に求む、裏が如き者は、外に求めて以て内に儲へ、而て詩を作り、而て文を属す、相反するが如く然り」、と言った。しかし、『古本大学刮目』の草稿を見せると、「是れ一家言にあらず、昔儒格言の府なり」、と言ひ、また、未刻の『洗心洞箭記』の数条を示すと、「聖学の奥に於てや間然する所なし、深く太虚の説に服す」、と言った。だが、山陽はその秋に吐血して世を去った。しかし、山陽が書いた送序の文章によると、「我れを知る者は山陽

に若くはなきなり」、と言わざるを得ない。山陽は自分の学問が心学であることを知っていた。山陽は、『洗心洞箭記』のすべてを読んではいけないけれども、「我が心学を知らば則ち未だ箭記の両巻を尽さずとも猶之を尽すがごとき」ものである。このように、平八郎も、山陽の胆と見識に深く共鳴していたのである。

ところで、ここで、猪飼敬所が、頼山陽と大塩平八郎をどのように見ていたかを述べておこう。敬所は、洪江抽斎、伊沢蘭軒、北條霞亭などと比べるとはるかに有名な儒者だが、しかし、敬所も抽斎などと同じく考証学者であつたからである。鷗外は敬所について言及したことはないようだが、平八郎と山陽両者と交際があつた考証家の言として注目してもよからう。

平八郎が敬所をどう思っていたかは、平八郎自身、「追鐫猪飼翁校讐之記」⁽⁶⁾を書いていたので、同記によつてある程度理解できる。ある日二人が会つた時、敬所が、「聖賢ノ道ニ従事スト雖モ、然レドモ、唯悪人ヲ制スル能ハズ。是レ乃チ短ナリ」、と言つたことに對して、平八郎は、「夫レ其ノ真ニ悪人ヲ制スル能ハザルハ、則乃チ悪人ヲ知ラザルヲ以テノ故ナリ。悪人ヲ知ラザルノ原ハ、豈良知ノ致サレズニ非ラズヤ」、と考える。そして同記の最後で、「晏子ノ賢ヲ以テスルモ、而シテ其ノ学問ノ意見乃チ障ト為ル。遂ニ孔子ヲ目スルニ滑稽ヲ以テス。則チ其レ太虚良知ヲ信ゼザル人ノ学問、概シテ意見一路ニ陥ル。翁豈其レ然ランヤ」、と述べている。これに對して、敬所は平八郎をどう思っていたらうか。しばしば名前が見られる敬所の書簡の中から、一、二つ拾ってみよう。⁽⁷⁾「大塩平八

郎貴家二兩日逗留。如貴論當時ノ豪傑。學術陽明ニテ。記誦詞章ノ徒ト大ニ懸隔。……老拙少年手島氏ノ心学ヲ学フ。……古学モ。朱学モ。陽明モ。手島モ。一二ハ其人ノ賢不賢才不才ニテ。學術而已ニテモ無御座候。……如貴論。學術ノ異同ヲ以テ。其人ヲ排スルハ。実ニ儒者根性ニ御座候。近世如来山人雖門下之士。不論學術之異同。唯以実用為主。我輩ノ法トスヘキ所ナリ。「儒者根性」を持った儒者とは、西洋語の metaphysician、即ち形而上学者ということになるうか。次の文章は、平八郎乱後に書かれた書簡の一節である。「大塩性剛ニシテ。思慮淺シ。故ニ慷慨激烈ニシテ。決断アリ。知進而不知退。見成而不見敗。……如此ノ淺慮ニテ。湯武ヲ学フコト。狂妄ノ至。誠ニ憫笑スヘシ。……大塩が落書ニ言ヘル所。下民ノ快トスル處ニテ。上タル人ノ深誠トスヘシ。古ヨリカ、ル事アル。乱之端ナリ。竊ニ冀フ上位ノ人々。是ニ因テ畏懼ヲ生シ。奢侈ヲ戒メ。民ヲ恤シ玉ハンコトラ。」

山陽にも、敬所の七十歳を寿いだ文章がある。「羽二重説寿猪飼翁」がそれで、山陽はその中で、敬所の学問と自分の学問とを比較している。「翁ノ学ハ、精ニシテ約、瑩ニシテ瑕無ク、其ノ弁ズルトコロニ贅ラズ。……其ノ行ヒハ原ク、其ノ節ハ常有リ。人敢テ狎レザルモ、舍テテ佗求スル能ハズ。其レ猶ホ羽二重ノゴトキカ。……吾ハ鄙人ナリ。鄙ニ学ンデ京ニ居ルコト、猶ホ河内木綿ノゴトキカ。其ノ粗ニシテ且ツ朴ナル……」。これに対して、敬所は、山陽の学問が粗雑であることに嫌らざるものを感じてはいたが、その人物や見識には大いに興味を持っていた。山陽死後、谷三山に宛て

た書簡の中で、敬所は以下のように言っている。「山陽カ眼空古今。……然レトモ其説モ亦有知一不知二者。……山陽ハ才子故。学問ハ甚疎。……書経書後諸文ヲ見ルニ。学問ハ疎ナレトモ。大ニ有識。往々愚見ト合ス。……山陽少年無行ニテ。父ノ家ヲ継ク不能。コレヲ以テ世ノ正人ニ擯棄セラル。惜カナ。近年志向正路。有孝於其母。……旧臘余カ臥病ト聞テ。山陽カ寡婦ヨリ。十二歳ノ孤児ヲシテ見舞ニ来リ。親シク病状ヲ見來レト命ス。其親切ナル。山陽ノ余ヲ信スル誠心。身後ニミユ。余於人有二悔。壮年不知履軒之学識。故不従之学。老年不知山陽之奇才。故不與之友。如此二子。豈易得乎。」

以上、猪飼敬所と大塩平八郎との関係、敬所と頼山陽との関係について、極々簡単に見たが、そこで言えるのは、敬所の平八郎観が鷗外のそれと大体似かよっているといつてよいようであるけれども、山陽についてはどうであろうか。敬所が晩年、山陽と親しく接して、山陽の中に愛すべき人柄と鋭い見識とを見出していたことは、上の書簡から明らかである。しかしまた、同書簡の中で、山陽の著作や学問について、「其説モ亦有知一不知二者」、「山陽ハ才子故。学問ハ甚疎」、と評していることにも注意すべきであろう。山陽の父春水が、朱子学者だったことはよく知られているけれども、子の山陽は、朱子学に拘泥することはなかった。また、陽明学に走ることも、考証学に信を置くこともなかった。この点では、大塩平八郎とは大いに異っていたといえよう。恐らく、山陽は、経学者というより、詩人であり何よりも歴史家であった。しかし、敬所は山

陽の議論の中に、「知一不知二」なるものを認めていた。そしてこれは、平八郎についての、「知進而不知退」、とした評とどこか通ずるものはないだろうか。学派にこだわった平八郎と歴史の見方にこだわった山陽と、確かに似たところがある。しかしより注目されるのは、山陽が「才子」と評されていることである。この才子が必ずしも讃辞でないことは「学問ハ甚疎」と続いていることから明らかである。

ところで、才子で思い出されるのが、文政五年三月に、菅茶山が伊沢蘭軒に宛てた書簡の中で、「実底に御読書あれかしと奉存候。才子は浮躁なりやすきものに候」と言っているところである。これが、山陽を念頭に書かれたものかどうかは分からないけれども、鷗外がこの茶山の文章に大いに共感を覚えたであろうことは想像に難くない。この茶山の書簡の文章は『伊沢蘭軒』その百二十七に出てくる。

(三)

上にも述べたように、鷗外が、『伊沢蘭軒』、『北條霞亭』で描きたかった構図の一つは、山陽と蘭軒、霞亭との対比である。このことは、『伊沢蘭軒』のその一からも明らかである。その一は、山陽の幽屏事件から書き始められていて、同事件にかかわる菅茶山の書簡を取り挙げ、その書簡の宛名の人が伊沢蘭軒ではないかという坂本箕山の推測を紹介し、「これは蘭軒の名が一時いかに深く埋没せ

られてゐたかを示」したかったからだ、と述べて終っている。江戸後期から、『日本外史』その他の著述で、その名を全国に轟かせていた山陽、それに対し、鷗外が書かなければその名は歴史に埋没していたであろう蘭軒、『伊沢蘭軒』はその一から、山陽と蘭軒の対比が意識されて書かれているのである。そしてその十八では、両者の面目が次のように対比されている。「蘭軒が没した後に、山田椿庭は其遺稿に題するに七古一篇を以てした。中に『平生不喜苟著述、二卷随筆身後伝』の語がある。これが蘭軒の面目である。」そして、「山陽は能く初志を遂げ、文名身後に伝はり、天下其名を識らざるなきに至つた。これが山陽の面目である」と。

このような両者に対して、言うまでもなく、蘭軒などより山陽の方がはるかに高く評価されてきた。しかし、上にも述べたように、鷗外は、そうした一般的な評価とは違って、蘭軒などの残した事跡と山陽の残した事跡とは、同じ程度の価値を持っているとするのである。そのため、山陽に対する評価に一般と違ったものがしばしば見られる。その中の二、三をここに拾ってみよう。

『伊沢蘭軒』その五十八に、菅茶山が文化七年八月に蘭軒に与えた書簡が引用されているが、その中に山陽について記した文章が見られる。「文章は無双也。……年すでに三十一、少し流行におくれたをのこ、廿前後の人の様に候。はやく年よれかしと奉存候事に候」。この文章について、鷗外がその六十で、以下のように解釈している。「『文章は無双也』の一句は茶山が傾倒の情を言ひ尽してゐる。傾倒の情愈深くして、其疵病に嫌ぬ感も愈切ならざるを得な

い。『年すでに三十一、すこし流行におくれたるをのこ、廿前後の人の様に候。はやく年よれかしと奉存候事に候。』其才には牽引せられ、其迹には反撥せられてゐる茶山の心理状態が遺憾なく数句の中に籠められてゐて、人をして親しく老茶山の言を聴くが如き念を作さしむるのである。』恐らく鷗外も、茶山のこの山陽評を読んで、同情を禁じ得なかつたであらう。

文化十三年に帰省した時、霞亭は途中山陽を訪わなかつたので、文政四年の時には山陽を訪うた。『北條霞亭』その百三十九に、次のようにある。「文化丙子に霞亭が帰省した時、山陽を訪はなかつたので、山陽は不平を茶山の前に鳴らしたことがある。わたくしは浜野氏に借りて一読した『十月廿二日頼襄拜、菅先生函丈』と書した尺牘中の語を是の如くに解するのである。『北條君京へ帰路被枉候様兼約にて、中山（言倫）などと申合相待居候処、山崎間道より被落候段、其翌日一僧より伝承、遣一支兵追撃とも奉存候へども不能其儀、扱々失望、中山などは腹を立居候。』霞亭は今度往訪して前過を償はなくてはならなかつたのである。』鷗外の深読みかもしれないけれども、鷗外が山陽の心をどう見ていたかがよく窺われるところである。

また、文政四年四月、霞亭は、藩主阿部正精に江戸に召された霞亭は、備後神辺康塾の都講から江戸詰に昇進したが、それについて、山陽が茶山に送った書簡に次のようにある。「尚々北條先生何やら昇進とか、江戸詰は逢旧友とて可面白候へども、山野放浪之性、待講などは大困と奉存候。可憐々々。」これに対して鷗外は、

「尋常の賀詞を呈せぬ処に山陽の面目を見る」、と評している。

以上から窺えるように、鷗外の山陽評は一般のそれとは些か違っていた。しかしそれは、鷗外が山陽の行績を認めていなかったということではない。鷗外が『北條霞亭』を執筆する動機の一つは、山陽が書いた霞亭の墓碣銘であり、しかも鷗外はその文章を称した。『霞亭生涯の末一年』最後のその十七に、墓碣銘の「文は好く出来てゐる。四巷が書いたり、檀宇が書いたりしたら、これ程の文が出来なかつたことは勿論である。死して此文を獲たのは霞亭の幸であつた。『摠実而書、不浪没其人之真様にいたす』と云ひ、『景陽不死と申様には書て可上』と云つた山陽は、実に言を食まなかつた。』と鷗外は山陽の行績を讃えているのである。

そして、鷗外は、一方の霞亭の学問に対しても冷静に評価している。「霞亭はわたくしの初めより伝を立てようとした人ではない。儒林に入るとしても、文苑に入るとしても、あまり高い位置をば占め得ぬ人であらう。」と『霞亭生涯の末一年』のその一にある。これは、狩谷敏斎や松崎謙堂などと比較したところに出てくる文章で、山陽と比較したものではない。しかし、上にも述べたように、山陽が書いた「北条子謙墓碣銘」を、「文はよく出来てゐる」と言い、別の人が書いたりしたら「これ程の文が出来なかつたことは勿論である」、と書いていることから、鷗外が山陽の文才を評価していたことは疑い得ない。鷗外は、菅茶山を、「天成の文人」と言い、「俗簡を作るに臨んでも、字を下すことは的確動すべからざるものがある」（『伊沢蘭軒』その七十九）と評したが、その茶山が、

山陽の文章を「無双也」と評したのであるから、鷗外はこの茶山の山陽評を敢て斥ける理由を見出さなかったであろう。

では一体何故、鷗外は山陽ではなく、蘭軒や霞亭などの史伝を書いたであろうか。山陽の残した事跡と霞亭などの残した事跡とが甲乙つけ難い同等のものと、鷗外が認めていたことは、既に上に述べた通りである。しかしそれだけであるならば、山陽の史伝を作ってもよかったはずである。当時、山陽に関する著作が数多く刊行されていて、屋上屋を架すという事情があったにしても。しかし鷗外は、蘭軒、霞亭などの史伝を作った。そこにはいま一つ理由があったと思われる。それは、鷗外が、明治の終り頃から、山陽が活動したような世界と、蘭軒などが活動したような世界とを区別し、次第に後者のような世界を重視するようになったことである。繰り返すことになるけれども、和辻哲郎の言葉を使えば、山陽や大塩平八郎などは、「時代の動揺してゐる思潮に働きかけるといふことをした人たち」であり、蘭軒や霞亭などは、「じみな考証学者の群れ」である。つまり、鷗外は、前者の「人たち」の活動や残した事跡よりも、後者の「群れ」の活動や残した事跡の方をより尊ぶようになるのである。何故なら、後者の群れの活動や事跡が基礎であり土台であって、その上にはじめて前者の人たちの活動が成り立ち、事跡が作られると考えられたからである。そして鷗外は、明治の終り頃から、その基礎であり土台である世界、いわば深層の世界が混乱し、次第に崩れつつあることをハッキリ認識するようになったので、その深層の世界をいま一度見直す必要に迫られたのだった。その必死の努

力の産物が、『洪江抽斎』、『伊沢蘭軒』、『北條霞亭』であったのである。

日本文化の基礎、土台、つまり深層の世界の混乱と崩壊を導きつつあると鷗外が考えた理由には勿論種々ある。その一つは、西洋文化の生翳り、あるいは歪められた輸入である。改めて述べるまでもなく、鷗外が留学から帰国した後、懸命に取り組んだのがこの問題であった。そして、この問題について鷗外が得た結論を史伝の中に求めるとすると、「享和中の諸生は香を懐にして舟に上った。当時の支那文化は大正の西洋文化に優つてゐたやうである」(『伊沢蘭軒』その百四十二)、ということになる。これは、二十四歳の霞亭が友人たちと墨田川に舟を浮べ雪を賞した時、香を焚いて盃を挙げたところにある文章である。

歴史観は、山陽、鷗外が最も考え抜いた問題であった。山陽は、『日本外史』その他の著作で、和辻も書いているように、勤王史観といつていいものを唱えて、幕末期に多くの読者を獲得し、政治運動にも大きな影響を与えた。鷗外も、『かのやうに』など所謂「秀麿もの」と呼ばれる小説の中で、広い意味での歴史問題を扱っており、フラインヒンガーのAls Ob 哲学を借りて、一応の解決法を提示している。しかし、勤王史観といい、Als Ob 哲学といつても、その根底に、豊かな歴史への関心があつてはじめて意義を持つ。だが、鷗外の見るところ、明治末頃には、既に、豊かな歴史への関心そのものが希薄になっていたのである。しかも他方では、史観だけは様々な形で流行している。それは、儒学の世界がもうハッキリと

人々の心に思い浮ばなくなっているにも拘らず、朱子学とか陽明学といった學術用語だけが一人歩きしているのと一般である。つまり、頼山陽の歴史観も、大塩平八郎の良知の学も、それぞれの基礎、土台を失いつつあるというのである。それは丁度、明治以後、西洋の自然主義や個人主義、社会改良主義や社会主義、更には女性解放といったものを、西洋文化の基礎、土台を考慮せずに、受け入れてきたが、そのためもあってか、文化の基礎、土台を異にする日本において、それらの用語、概念だけが一人歩きをしているのと同じ。鷗外もそうした自然主義や個人主義、社会主義などの問題に鷗外なりに懸命に真剣に取り組んだ。西洋文化の優れたものを、文化の土台、基礎の違う日本にどうすればうまく移植できるかを、誰よりも真剣に考え、誠実に実行しようとしたのが鷗外であった。そしてそれは最晩年まで続けられた。

しかし大正時代に入ると、鷗外の問題関心は、次第に、失われつつある日本文化の基礎、土台に向けられていった。だがこれは決して消極的な行為ではない。そうした文化の基礎、土台があつて、はじめてその上に、創造的な活動が行われ、文化的事跡が刻印され得るからである。

では鷗外は文化の基礎、土台を何に見たのであろうか。その最も大きなものは、「じみな考証家たち」の活動と事跡であり、鷗外にとつて、それは、「言葉の世界」といつてもよいものであり、和辻の用語でいえば、「日常生活」であった。鷗外が生涯にわたつて最も意を用いたのは言葉の問題であり、言葉の世界であった。鷗外に

とつて、日本の近代化の問題とは、言葉の世界の問題だったのであり、明治以前の言葉の世界を、出来る限り自然な形で、西洋文化を受け容れた近代日本の言葉に移行させることであつた。しかし、鷗外は自らもその形成に関わつた近代日本の言葉の世界に、明治末頃から、何か満たされぬものを感じるようになった。即ち、日本社会の「日常生活」に不安定なものを感じるようになったのである。鷗外が若い頃、医学、評論、文学、演劇などの分野で、啓蒙的活動を行つたのも、日本の「日常生活」が堅固で、信じるに足るものと思つていたからであつた。だがその「日常生活」に鷗外は不安を感じ始めたのである。

何故、日本の「日常生活」は不安定になつたのであろう。それは、日本の知識人たちの近代西洋文化に対する理解と関わつていた。史伝の中で、近代日本を代表する知識人としては、福沢諭吉や中江兆民くらいの名前しか出ていないけれども、鷗外の頭には、その他、様々な領域で活躍していた多くの知識人たちの名前が浮んでいたはずである。そして重要なことは、既に述べたように、これら近代日本の知識人たちが、頼山陽や大塩平八郎といった江戸時代の知識人たちの延長上で捉えられていること、しかし、近代日本の知識人たちの西洋文化理解は、山陽や平八郎などの中国文化理解よりも、雑で生翳りである、ということである。また、近代西洋文化に対する日本の対応として自ら提示した利他的個人主義や *As One* 哲学といった議論も、日本社会の日常生活の混乱と歪みを目にする、と、単なる弥縫策に過ぎないように思えてきた。

こうして大正時代に入ると、鷗外は現代小説を書くことを次第に止め、歴史小説を執筆することになった。そして、歴史小説を書くための資料を探索している時、不図したことから、洪江抽斎や伊沢蘭軒や北條霞亭といった考証学者たちを発見していくのである。『洪江抽斎』その三で、鷗外は抽斎との出会いについて書いている。「わたくしの抽斎を知ったのは奇縁である。……文章の題材を、種々の周囲の状況のために、過去に求めるやうになつてから、わたくしは徳川時代の事跡を搜つた。そこに武鑑を検する必要が生じた。……徳川時代の某年某月の現在人物等を断面的に知るには、これに優る史料は無い。そこでわたくしは自ら武鑑を蒐集することに着手した。此蒐集の間に、わたくしは弘前医官洪江氏蔵書記と云ふ朱印のある本に度々出逢つて、中には買ひ入れたものもある。わたくしはこれによつて弘前の官医で洪江と云ふ人が、多く武鑑を蔵してゐたと云ふことを、先づ知つた」。そして、『洪江抽斎』を執筆中に、伊沢蘭軒を知つたのであり、『伊沢蘭軒』執筆中に、北條霞亭に出会つたのであった。このように、抽斎や蘭軒などの鷗外の出会いは、偶然だったといつてよいものであった。鷗外にしてこうだったのであるから、抽斎や蘭軒などが、頼山陽や大塩平八郎などに比して、社会においていかに知られていない人物であつたかが分かる。しかし鷗外は、これらの人物の活動事跡を山陽などのそれに劣るものでないと評価するだけでなく、畏敬の念を隠そうとしないのである。『洪江抽斎』その六に次のようにある。「抽斎は医者であつた。そして官吏であつた。そして経書や諸子のやうな哲学方面の書

をも読み、詩文集のやうな文芸方面の書をも読んだ。其迹が頗るわたくしと相似てゐる。只その相殊なる所は、古今時を異にして、生の相及ばざるのみである。いや。さうではない。今一つ大きい差別がある。それは抽斎が哲学文芸に於いて、考証家として樹立することを得るだけの地位に達してゐたのに、わたくしは雑駁なるデレツタンスチスムの境界を脱することが出来ない。わたくしは抽斎に視て忤怩たらざることを得ない。抽斎は曾てわたくしと同じ道を歩いた人である。しかし其健脚はわたくしの比ではなかつた。廻にわたくしに優つた済勝の具を有してゐた。抽斎はわたくしのためには畏敬すべき人である」。

勿論、鷗外は、洪江抽斎を「畏敬すべき人」であるとしたのであつて、抽斎を主人として、同人に仕えようとしたのではない。だがこのような鷗外の態度に、これまでのと些か違つたものを感じないであろうか。鷗外はこれまでも、畏敬すべき多くの先生に出会い、彼らから学んだけれども、しかし誰かに付いて仕えようとはしなかつた。「妄想」の中に以下のような文章がある。「冷淡には見てゐたが、自分は辻に立つてゐて、度々帽を脱いだ。昔の人にも今の人にも、敬意を表すべき人が大勢あつたのである。帽は脱いだが、辻を離れてどの人かの跡に付いて行かうとは思はなかつた。多くの師には逢つたが、一人の主には逢はなかつたのである。」フォイトやハルトマンやショーペンハウエルやフラインヒンガーなどが、鷗外が敬意を表した先生たちだったのであろう。だが、これらの先生たちからは、知的な満足は得られたけれども、それ以上のものは得られ

なかった。鷗外は続ける。「兎に角、辻に立つ人は多くの師に逢つて、一人の主にも逢はなかつた。そしてどんなに巧みに組み立てた形而上学でも、一篇の抒情詩に等しいものだ」と云ふことを知つた。

しかし鷗外にとつて、抽斎や霞亭などは、ハルトマンやフラインヒンガーなどは些か違つていた。芥川龍之介は、鷗外を千桑山房に訪ねた時に目にした光景を、『文芸的な、余りに文芸的な』の中で以下のように書いてゐる。「内は鷗外の言葉である。」「この間柴野栗山(?)の手紙を集めて本に出した人が来たから、僕はあの本はよく出来てゐる、唯手紙が年代順に並べてないのは惜しいと言つた。するとその人は日本の手紙は生憎月日しか書いてないから、年代順に並べることは到底出来ないと返事をした。それから僕はこの古手紙を指さし、ここに北條霞亭の手紙が何十本かある、しかも皆年代順に並んでゐると言つた。！僕はその時の先生の昂然としてゐたのを覚えてゐる」¹¹⁾。この「昂然」という表現から、史伝を執筆していた時の鷗外が、いかにも心体共に充実していたかを窺うことができる。それは、「畏敬」から生じてくる充実である。

(四)

このように、鷗外は「畏敬」の心をもつて、『渋江抽斎』、『伊沢蘭軒』、『北條霞亭』などの史伝を書いた。『伊沢蘭軒』は、医学書、翻訳書を除けば、鷗外の著述の中で最も大部のものであり、これに『北條霞亭』が次ぎ、『渋江抽斎』がその後にくる。そして恐らくそ

れらに、『青年』、『雁』と続くであろう。芸術性という観点からのみいへば、あるいは『雁』は、それらの史伝より、より高く評価されてよいかもしれない。また、思想的側面からいへば、『青年』は、社会が直面している様々な思想的問題を扱つていて、社会へのインパクトとなれば、明らかにそれら史伝より大きなものを持つてゐるといわねばならぬであらう。しかし、芸術性や思想性も含め、総合的に見るならば、これらの史伝が、鷗外のすべての文学作品の中で、最も優れたものであると評価されるべきであらう。

さて鷗外は、『山椒太夫』や『高瀬舟』や『寒山捨得』などの歴史小説を書いた後、史伝の執筆に向かう¹²⁾。そして、鷗外が扱つた渋江抽斎、伊沢蘭軒、北條霞亭は何れも学者である。即ち、儒医あるいは儒者である。鷗外の現代小説にも、学者を主人公にした作品がかなりあるが、しかし史伝となると、やはりそこに、一定の傾向を持ち込むことは避け得ぬであらう。『伊沢蘭軒』の後に書かれた小史伝『小嶋宝素』の中で、鷗外は次のように書いてゐる。「学者の伝記は王侯将相の直に国の興亡に繋るものとは別である。又奇傑の士、游侠の徒の事跡が心を驚し魄を動すとは別である。学者の物たる、縦ひ其生涯に得喪窮達の小波瀾があつても、細に日常生活を叙するにあらざるよりは、其趣を領略することが出来ぬであらう。」確かに、史伝には、抽斎、蘭軒、霞亭といった学者たちの事細い日常生活が描かれている。だが鷗外の史伝に描かれている彼等の日常生活は、王侯将相や奇傑の士や游侠の徒の国家的、社会的事跡よりもより意義のあるものであつた。それは、彼等の日常生活そのもの

が、「言葉の世界」だったからである。言うまでもなく、彼等が考証学者であったこととそれは深く関わっている。しかし彼等は、儒学の中の考証学者であった。

勿論、鷗外は国学にも通じていた。鷗外が幼少年時代学んだ藩校・養老館では、儒学の外に国学も教えられていた。「仮名遣意見」の中には、契仲や本居宣長や北村季吟という国学者たちの名前が出ている。更に、鷗外が仏教書やキリスト教関連の文献も読んでいたことは明らかである。「妄想」の中に、以下のような文章が見られる。ベルリンで苦痛のため眠れない時、「これまで人に聞いたり本で読んだりした仏教や基督教の思想の断片が次第もなく、心に浮んで来」る。だが、それは「直ぐに消えてしまふ。なんの慰藉をも与えずに消えてしまふ」。この文章から推測する限りでは、仏教やキリスト教に対する関心はそれほど強くはなかったようである。しかし、ハルトマンやショーペンハウエルなどの厭世学者に惹かれたことは、鷗外の心底に仏教的なものがあつたのではないかと想像され得る。それはともかく、鷗外の思想と生き方の骨格を作っていたのは間違いなく儒学であつた。十歳頃までに鷗外は、論語や孟子などの四書、書経や詩経などの五経、更に、国語、史記、漢書などを読んでいた。鷗外はそうした儒学、漢学の教養の上に洋学を学んだのである。そして、幼少年期に身につけた儒学、漢学の教養は、深く人間鷗外の根底に留まり続け、生涯それから逃がれようとしなかったし、寧ろ大事に見守り続けた、と言つた方がよいであろう。だが、明治以後の近代化は日本社会に激変をもたらし、儒学もそ

れから免れることはできなかった。儒学は近代化の波の中で急速に衰退していった。儒学は最早や權威を持たなくなった。しかし考えてみると、江戸時代においても、萩生徂徠などは朱子学の權威を否定していたのである。もともと、徂徠は、中国古代の聖人の權威を絶対のものとしてはいたが。それ故に、大正のこの時代に、儒学を復活させるなどということは到底できない。大体こうした考えを「礼儀小言」の中で鷗外は書いている。¹³ このような儒学の權威が衰えてしまっている時代に、やれ朱子派だ、やれ陽明学派だなどといった意味はない。だが鷗外は、儒学の言葉の世界はまだ生きていると信じていた。明治以後の儒学の運命をこう理解していた鷗外が、抽斎などの考証学者に出会って畏敬の念を抱くようになったのも、容易に理解できるのである。しかも、抽斎や蘭軒や霞亭などの言葉の世界は、ただ儒学だけの言葉の世界ではなく、国学や仏教、あるいは老子などの世界と共存できる世界であり、更には、西洋との共存をも可能とするような世界であつた。そういう意味で、それはまことに豊かで広々とした言葉の世界だったのである。

「空車」は象徴的なエッセイである。だからといって、どう解釈してもよいということにはならないが、「空車」を上のような「言葉の世界」と解釈しても、それほど誤つてはないであろう。鷗外は「空車」を「目迎へてこれを送ることを禁じ得ない」、¹⁴ といっているが、「言葉の世界」をそのまま受け容れ、その世界を大事に尊重したということであろう。そして空車に繋がれている馬が考証学であり、馬の口を取っている男が考証学者ということになるのではない

だろうか。¹⁴ また、「或物を載せた車」の或物は、史観、理論、学説、教義といったものではないであろうか。

以下、抽斎や蘭軒、霞亭の言葉の世界がいかなるものであったかを簡単に見ることにしよう。

海保漁村によると、日本の考証学は、吉田篁墩に始まり、狩谷棧斎がこれに継ぎ、その後、市野迷庵、伊沢蘭軒、小嶋宝素、洪江抽斎、森枳園と継承・発展したとされる。抽斎の考証学は、市野迷庵に基づいているが、迷庵は以下のように考えた。中国では宋の時代、程頤や朱熹などが出て、また日本では伊藤仁斎や荻生徂徠などが現れて、各々自己の学問を建て、相争っているため、何が儒学か分からなくなっている。だから、「儒者の道を学ばむと思はゞ、先づ文字を精出して覚ゆるがよし」(『読書指南』)。抽斎はこのような迷庵の教えを継承した。抽斎は、『憲語』の中で次のように言っている。「凡そ学問の道は、六経を始め聖人の道を身に行ふを主とする事は勿論なり。扱其六経を読み明めむとするには必ず其一言一句をも審に研究せざるべからず。一言一句を研究するには、文字の音義を詳にすること肝要なり、文字の音義を詳にするには、先ず善本を多く求めて、異同を比讐し、謬誤を校正し、其字句を定めて後に、小学に熟練して、義理始めて明了なることを得。……故に百家の書読まざるべきものな」し、と。しかしこの考証学は、老子や仏教を排除するものではなく、進んで包み込むものであった。「老子の道は孔子と異なるに似たれども、その帰するところは一意なり。不患人不知己及び曾子の有若無実若虚などと云へる、皆老子の意に

近し。……孔子の道も孝悌仁義より初めて諸礼法は仏家の小乗なり。その一以貫之は此教を一にして執中に至り初めて仏家大乘の一場に至る。執中以上を語れば、孔子釈子同じ事なり」と抽斎は言っている。

その他にも抽斎は、『晏子春秋』や『国語』や『韓非子』なども熱心に読んだようである。抽斎の著作の中に、『晏子春秋筆録』があるし、また文集『憲語』の中に、「春秋外伝国語跋」という文章がある。更に、『洪江抽斎』その五十九に「韓非子は主道、揚権、解老、喻老の諸篇が好いと云った」、とある。言うまでもなく、主道、揚権などの諸篇は、『韓非子』の中で、老子の思想が見られるところである。

抽斎はかなりオランダ嫌いだったそうである。しかし晩年、安積艮齋の『洋外記略』などを借りて読み、その態度を変え、洋学の必要を認めた。そして死の前の遺言で、七男保に、オランダ語を学ばせるようにと言ったそうである。その後、保はオランダ語は学ばなかったが英語を学んだ。慶応義塾を卒業し、福沢諭吉からも知られ、同義塾の教師もした。中学校長や新聞記者としても活躍した。しかし最も力を尽したのは、出版社博文館のために、著作翻訳合わせて百五十点以上の著作物を刊行したことである。鷗外は言っている、保の「志す所は嚴君の経籍訪古誌を廓大して、古より今に及ばし、東より西に及ばずにあると謂つても、或は不可なることが無からう」と。更に注目されるのは、抽斎の四番目の妻五百が、保から英語を習って、パアリーの『万国史』やカッケンボスの『小米国

史』やホーセツト夫人の経済学関連の書物を読んでいたことである。

次に抽斎の師・伊沢蘭軒の考証学についてである。蘭軒の考証学を最もよく現しているのは、清人・張秋琴に与えた書簡であろう。『伊沢蘭軒』その五十三にある。「説書之業。漢儒専ら訓詁。宋儒長於論說。而晋唐者漢之末流。元明者宋之余波也。至貴朝。則一大信古考掘之学。涌然振起。注一古書。必離異於數本。考証於群籍。以償寡見。且猶所闕。有山海經新校正。……呂覽墨子晏子春秋等校注。是皆不以臆次刪定一字。而離異考証。所至尽也。不似朱明澆薄之世。妄加殺青。古書日益疵瑕也。只怪未見古医書之有考証者。近年有楓橋周錫瓚所刻華氏中藏經。全掇宋本。而其脫文處。由吳氏本補入。每下一按字以別之。不敢混淆。雖未得考掘之備。蓋信古者也。其他似斯者。亦無見矣」。

蘭軒の長男榛軒と次男柏軒は抽斎の友であったが、医学が漢から洋に移ろうとしていた時、この兄弟は、漢医方を死守しようとした。この問題は極めて興味深いので、別の機会に詳しく述べることにするが、ただ一言述べておけば、弟の柏軒は和歌を詠じ、神道を信じていたそうである。

北條霞亭は朱子学者であったが、清の高愈が作った『小学纂註』を校訂して翻刻した。『重訂小学纂註』がそれだが、『漢文大系』五に収められている。鷗外も引用しているが、同巻に付せられている解題で、この福山版の纂註と歙西豊苔堂版の心遠堂本とが比較されている。「……豊苔堂刊本の朱子総論は僅かに七条を録し、福山藩

翻刻本の総論は程子朱子以下十八人の説凡三十条を録す。又其題小学の下、註して原本作小学句読、末処何拠、或云、始於陳恭愍（選）、又有作小学書題、小学題序書、皆後人以意名之、今依朱子文集改正とあり。而して豊苔堂校刊本は此註なく、其題猶小学句読に依れば、福山藩翻刻本の高愈晩年の定本たる審なり。故に今之に拠る」。

霞亭が校刻した纂註には二種の本があるが、ただ端末を改刻しただけで、もとより同本で、「装して『元亨利貞』の四本となし、元亨に巻の一より巻四に至る内篇を収め、利貞に巻五より巻六に至る外篇を収め、毎巻頭に『高愈纂註』、毎巻尾に『後学北條讓校読』と記されている。霞亭が校刻した纂註は、かなり用いられたようで、松崎謙堂も、下総佐倉の成徳書院で同書を講じたそうである。

霞亭が和歌をよく詠む人であったことは、『北條霞亭』に霞亭の和歌がいくつも出ていることから明らかである。

以上、抽斎、蘭軒、霞亭などの考証学を簡単に見てきたが、また注目したいのは、彼等が風流や文化をよく解する人たちだったという点である。例えば、『洪江抽斎』に、抽斎は、「角兵衛獅子を観ることを好んで、奈何なる用事をも擱いて玄関へ見に出たさうである。これが風流である。詩的である」とある。

また某氏によると、伊沢柏軒と抽斎は大の祭礼好きだったそうである。『伊沢蘭軒』その三百二十五に以下のようにある。「柏軒先生や抽斎先生の祭礼好には、わたくし共青年は驚いた。……山車の出る日には両先生は前夜より泊り込んでゐて、斥候を派して報を待つ

た。距離が尚遠く、大鼓の響が未だ聞えぬに、斥候は帰つて、只今山車が出ましたと報ずる。両先生は直に福草履を穿いて馳せ出て、山車を迎へる。そして山車の背後に随つて歩くのである。車上の偶人、装飾等より囃の節奏に至るまで、両先生は仔細に觀察する。そして前年との優劣、その何故に優り、何故に劣れるかを推察する。わたくし共は毎に先生の帰つて語るのを聞いて、所謂大人者不失其赤子之心者也とは、先生方の事だと思つた。鷗外は、たまたま読んだ松崎憐堂の『日曆』から、「憐堂も亦祭祀好の一人ではなかつただらうか」と推測している。憐堂は、狩谷校斎とともに鷗外が最も書きたかつた人物である¹⁵。

既に上にも引用した文であるが、霞亭が二十四の時、友人等と墨田川に舟を浮べたことを記したところで、「享和中の諸生は香を懷にして舟に上つた。當時の支那文化は大正の西洋文化に優つてゐたやうである」と鷗外は言っている。

.....

『伊沢蘭軒』最後の三百七十一で、以下のように書いている。「蘭軒伝を無用とするものの書牘を見るに、問題は全く別所に存するやうである。書牘は皆詬訾毒罵の語をなしてゐる。此は此篇を藐視する消極の言ではなくて、此篇を嫉視する積極の言である。此嫉視は果して何れの処より来るか。わたくしは其情を推することの甚難からざるべきを思ふ。凡そ更新を欲するものは因襲を惡む。因襲を惡むこと甚しければ、歴史を觀ることを厭ふこととなる。此の如き人

は更新を以て歴史を顧慮して行ふべきものとはなさない。……蘭軒伝の世に容れられぬは、独り文が長くして人を倦ましめた故では無い。実はその往事を語るが故である。歴史なるが故である」。

この「更新」が頼山陽の歴史觀や大塩平八郎の良知の学の延長上で捉えられていることは疑い得ない。しかし、山陽の歴史觀も平八郎の良知の学も、東洋・日本の言葉の世界に支えられていたことは間違ひなく、それから切り離されてはいなかった。だが、明治以後の更新は、東洋・日本の言葉の世界を顧ることをせず、しかも、西洋の更新を、西洋の言葉からも切り離して、日本に持ち込もうとした。そのため、明治以後の更新は、日本の近代化を歪め混乱をもたらしした。鷗外が行つた更新は、東洋・日本の言葉の世界を顧慮しつつ、西洋の言葉の世界を正確に理解しようと努めながらなされたのであつた。鷗外が一方で史伝を書き、他方で最晩年まで翻訳を止めなかつたのもそのためであつた。

鷗外は、和辻哲郎などより歴史あるいは文化というものをより深く理解していたのではあるまいか。

注

(1) 和辻哲郎「文化と文化史と歴史小説」(和辻哲郎全集)第二十三卷、岩波書店、九六頁。同論の中で、いま一つ興味深いことは、和辻が、森鷗外と夏目漱石を比較しているところである。「森先生の歴史小説は、その心理觀察の鋭さと、描写の簡素と、文体の晴朗とで以て、われわれを驚嘆せしめる。例へば、『寒山捨得』では、……俗人の心理や眞の宗教的心境の暗示や人間の樂天的な無知などが、いかにも素々と、急所急所を抑へて描いてあるのに感服した。しかし私は何となく、本質へ迫る力の薄さを感じないではゐられない。先生の人格はあらゆる行に沁み出

てゐるが、それは理想の情熱に燃えてない、傍観者らしい、あくまで頭の理解で押し通さうとする人格のやうに思はれる。そこへ行くと夏目先生は、口では徹底欲を笑ふやうなことをいつてゐるが、真実は烈しい理想の情熱で、力限り最後の扉を押し開けようとしてゐる。夏目先生の取り扱ふ題目は、自分の内生を最も力強く揺り動かしてゐる問題である。あくまで心の理解で貫かうとする欲求も見えろる」(同、九七頁)。もつとも和辻は、これは、「夏目先生の長所と森先生の短所との比較」と断つてゐるが、漱石についてはともかく、恐らくその通りだと思つてゐるが、鷗外に関しては寧ろ逆で、現代小説の方が「頭の理解」で押し通そうとしたのに対し、歴史小説、そして史伝に行くに従つて、それに加えて、「心の理解」を伴うようになったのではないかと思われる。本論稿もそうした理解の上に書かれてゐる。尚、和辻には、鷗外について論じたものとして、その他に、「鷗外の思ひ出」(『全集』第二十卷所収)がある。

(2) 和辻哲郎「日本倫理想史」(『全集』第十三卷、三四五—六頁)。

(3) 頼山陽「訪大塩君。謝客而上衛。作此贈之」(大塩中斎「洗心洞劄記」、岩波文庫、四六九—七〇頁)。

(4) 頼山陽「奉送大塩君子起適尾張序」(同右、四六〇—一頁)。

(5) 以下、大塩中斎「洗心洞劄記」四五四—九頁。

(6) 大塩中斎「追鎬猪飼翁校讐之記」(『日本倫理想集』第三卷所収)、五—三—四頁。

(7) 以下の猪飼敬所の引用文は、すべて、「猪飼敬所先生書東集」(『日本儒林叢書』第三冊、東洋図書刊行会、昭和三年)からである。

(8) 頼山陽「羽二重説猪飼翁」(『頼山陽選集』3『頼山陽文集』所収、近藤出版社、昭和五十六年)、二二六—二二七頁。

(9) 「伊沢蘭軒」その十三からその十八あたりまで、鷗外は、伊沢氏の口碑によりながら、頼山陽が江戸遊学中に伊沢氏の家に寄寓し、『病源候論』の謄写を手伝わされてゐたのではないかと推論・考証している。例えば、その十四以下のようにある。「伊沢氏の口碑の伝ふる所はかうである。蘭軒は頼春水とも菅茶山とも交つた。就中茶山は同じく阿部家の俸を食む身の上であるので、其交が殊に深かつた。それゆゑ山陽は江戸に來たとき、本郷真砂町の伊沢の家で草鞋を脱いだ。其頃伊沢では

病源候論を写してゐたので、山陽は写字の手伝をした。」そして鷗外は、その十八で次のように言つてゐる。伊沢の家へ「闖入して來つた十八歳の山陽は何者であるか。三四年前に蘇子の論策を見て、「天地間有如此可喜者乎」と呼び、壁に貼つて日ごとに觀た人である。又数年の後に云ふ所を聞けば、「凌雲冲霄」が其志である。「一度大処へ出で、当世の才俊と被呼候者共と勝負を決し申し度」と云ひ、「四方を靡せ申度」と云つてゐる。そして山陽は能く初志を遂げ、文名身後に伝はり、天下其名を識らざるなきに至つた。これが山陽の面目である。少い彼蘭軒が少い此山陽をして、首を俯して筆耕を事とせしめたとする、わたくしは運命のイロニイに詫異せざることを得ない。わたくしは當時の山陽の顔が見たくてならない。以上の鷗外の推論・考証が誤りであつたことは既によく知られてゐることであるけれども、しかしそこに寧ろ、鷗外の山陽觀が率直に吐露されてゐると見ることもできるのではないだろうか。

(10) 和辻哲郎「日本倫理想史」、前掲書所収、三四六頁以下。

(11) 芥川龍之介「文芸的な、余りに文芸的な」(『芥川龍之介全集』第九卷、岩波書店、昭和五十五年)、その「十三 森先生」一三五頁。

引用文には次のような文章が続いてゐる。「かう云ふ先生に瞠目するものは必ずしも僕一人には限らないであらう。しかし正直に白状すれば、僕はアナトール・フランスの『ジャン・ダーク』よりも寧ろボオドレールの一行を残したいと思つてゐる一人である。また、その「十三 森先生」の中には、以下のような文章が見られる。『洪江拙斎』を書いた森先生は空前の大家だつたのに違ひない。僕はかう云ふ森先生に恐怖に近い敬意を感じてゐる。いや、或は書かなかつたとしても、先生の精力は聡明の資と共に僕を動かさずには置かなかつたであらう。しかし他方、芥川は次のようにも言つてゐる。森「先生の学は古今を貫き、識は東西を圧してゐるのは今更のやうに言はずとも善い。のみならず先生の小説や戯曲は大抵は渾然と出来上つてゐる。……しかし先生の短歌や俳句は如何に眞眼に見るとしても、畢に作家の域にはひつてゐない。……先生の短歌や俳句は何か一つ微妙なものを失つてゐる。……しかしこの微妙なものは先生の戯曲や小説にもやはり鋒芒を露はしてゐない。……僕はかう云ふことを考へた揚句、畢竟森先生は僕等のやうに神経質に生まれつてゐなかつたと云ふ結論に達した。或は畢に詩人より

も何か他のものだったと云ふ結論に達した」。この結論は、例えば、佐藤春夫の「詩人 森鷗外」とかなり違っている。佐藤は同文の冒頭で以下のように言っている。「森鷗外は詩人である。『舞姫』、『文づかひ』、『うたかたの記』等の少壮時の作品から晩年の『妄想』などの諸作をつぶさに見る人は何人も鷗外の詩人たる事は否定しないであらう」（『日本詩人全集17 佐藤春夫』、新潮社、昭和四十二年、二〇一頁。この問題は極めて重要であり、また、略々同時代の芥川と佐藤が非常に違った議論をしていることも興味深いので、別の機会に詳しく論ずることにする。

ただここで言っておきたいのは、和辻哲郎や芥川龍之介など、大正に入って活躍する思想家や作家と、江戸末期に生まれ、明治時代に活躍した鷗外との間に、何か溝のようなものがあって、大きく距てられていることは認めなければならない。その溝が何であるかを解明するためにも、鷗外の史伝を精読する必要があると思われる。

(12) 鷗外は大正四年一月に「歴史其儘と歴史離れ」というエッセイを書いている。これは「山椒大夫」を書いた時の楽屋裏を告白したもののだが、そこには何れ史伝に向かっていく心境的なものが吐露されている。「わたくしは史料を調べて見て、其中に窺はれる『自然』を尊重する念を発した。そしてそれを猥に変更するのが厭になった。……わたくしは又現存する人が自家の生活をありの儘に書くのを見て、現在があまりの儘に書いて好いなら、過去も書いて好い筈だと思つた。」

(13) 拙稿「安井息軒の学問観」（『日本地域文化ライブラリー1 日向の歴史と文化』所収、行人社、平成十八年、八五—八頁。

(14) 「空車」が発表されたのは大正五年の七月で、『渋江抽斎』が終りに近づき、「伊沢蘭軒」の構想が出来つつあった頃である。従って「空車」は、そうした史伝執筆を背景に書かれたものとも推測される。だから「空車」において鷗外は、「古言は宝である。しかし什襲してこれを蔵して置くのは、宝の持ちぐされである。縦ひ尊重して用ゐずに置くにしても、用ゐざれば死物である。わたしは宝を掘り出して活かしてこれを用ゐる。わたしは古言に新たな性命を与へる。」¹⁾といているが、史伝こそ鷗外がこのことを実行した場所ではなかったであろうか。例えば「鬆まつ開」や「儼巧」なども鷗外という古言であろうか。永井荷風「鷗外先

生」（『荷風全集』第十五卷、岩波書店、二四四頁）、石川淳「森鷗外」（『石川淳全集』第九卷、筑摩書房、一七五頁）など参照。

(15) 拙稿「安井息軒の学問観」、前掲書、八三頁。

※尚、森鷗外作品の引用はすべて『鷗外選集』（全三十一巻、岩波書店）によっている。